■トピックス

カナダの生活の中から

河村　総子

日本からカナダという異文化の中に投げ出された私にとって、最初のカルチャー・ショックは、「女性がちがう」ということだった。私は、異質の社会の人々と接して、特に、女性の態度と社会的存在としての扱われ方が、日本とは随分ちがうように思った。この事実は、以前に日本へ来たことのあるカナダ人の友人が、「日本で何を強く感じましたか」という私の問いに、「日本の女性」と答えたことからも言えると思う。

何もかも珍しく感じられた最初の頃、私は何組かの夫婦の集まる夕食の席で、夫人たちが実に堂々と振るまい、はっきりと意見を述べながら会話をすすめていく姿に接し、日本の女性との違いを強く印象づけられたのだった。また、買い物の折りに経験する女店員の態度、銀行の窓口の女性などのきっぱりした対応に、圧倒されそうな気分になったことも、しばしばだった。

彼女たちが、主婦の仕事以外に、心理治療士、ソシアル・ワーカー、あるいは教師などのパートタイムの仕事をもったり、ボランティア活動をしたりして社会と接触をもつことによって、社会的存在として自覚しているように思われた。また、夫婦単位の社交の習慣が、女性の能力を驚くほどはっきりあらわしてしまうことが、彼女たちをはりきらせる力になっていることも、事実のようだ。

ある友人の家でのパーティの席で、大学院に在席しているというA夫人が、教育論の問題で、よその御主人と議論になったことがあった。そのとき、A夫人は少し旗色が悪かったけれども、とうとう意地を通し、彼の方は、女性をたてる精神を発揮せずに終わった。

また、私の隣人のB夫人は、七十才代の未亡人だったが、「クリスマスの休暇には、娘の所へ泊まりに行くけど、ひとり暮しが一番いいわ」とあっさり言いきった。女性といえども、自己を第一に考えるという精神を貫くという、しっかりとした姿勢を、私は感じた。

生涯、親とか夫、あるいは子供によりかかって、妥協の中に生きることを自然に受け入れてきた日本の女性を見慣れていた目に、自我のはっきりした異質の女性像が、様々の年代にわたって、身近に見られたことは、まさに衝撃というべきものだった。これは、やはり社会そのものの違いによるものであろうか。

日加国交五十周年

来年は、カナダが日本と国交を樹立してから五十年目に当る。当時、法的にはまだカナダの対外関係を扱っていた英国を除き、日本はカナダにとって、アメリカ合衆国、フランスに次いで三番目に外交代表部(公使館)をおいた国であった。五十周年を記念して、いろいろな計画が立てられている。

カナダ・スキー・ツアー全ガイド

カナダ政府観光局東京事務所では、今シーズンも日本の多くのスキーヤーにカナダの大自然でのスキーを楽しんでもらおうと、「カナダ・スキー・ツアー全ガイド」を発行した。

これは、十二月から来年四月にかけて予定されている主なスキー・ツアーの内容を網羅し、かつ主なスキー場を紹介したもので、希望者には、はがきで申込めば無料で送付している。宛て先は、東京都港区赤坂八―五―三二　山勝ビル　カナダ政府観光局。

老眼にコンタクト・レンズ

遠近両用の二焦点めがねに代わる軟らかいコンタクト・レンズが、カナダで開発された。この一枚レンズは、二焦点めがねと違って、焦点に合わせて目を上下しなくてもすむという利点がある。二焦点めがねをかけている三百人以上の人々にテストしてもらったところ、八十パーセントが何の問題もなく装着できたという。

編集後記

●日大北極点遠征隊に続いて、植村直己さんが北極点に達するなど、今年の日本は北極ブームに湧きました。北極からとり寄せた氷を、お酒の宣伝に使ったところもあったほどです。

●カナダでは、北方が別の意味で脚光を浴びています。ボーフォート海を中心に石油・天然ガスが発見され、埋立て、または氷をさらに凍結して作った人工の島を使って海底の掘削が進められています。本紙第十四号でお伝えしましたように、ボーフォート海からユーコン南部、アルバータ州を通るパイプラインの建設も、米加間で合意されています。カナダ北方の地下資源が注目されるとともに、北方に住むイヌイット(エスキモー)やインディアンの生活、および一帯の生態系に及ぼす開発の影響についても、関心が高まってきました。そこで、本号では、開発とその社会的・環境的影響という二つの観点から、カナダ北方の現状を特集しました。

●文学特集でもとり上げたファーリー・モーワット氏は、北極が北半球の〝中心〟であるというユニークな視点でカナダ北方を紹介しています。日大北極点遠征隊に同行した読売新聞社会部の江本嘉伸氏は、エベレスト登山取材などの経験もあるベテラン記者。北極遠征のルポルタージュ「北極点をめざす野郎たち」(読売新聞社刊)の共同執筆者でもあります。同氏には、遠征中見聞した、カナダ北方の動物と自然のようを書いてもらいました。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107東京都港区赤坂七丁目三―二八
カナダ大使館広報部